英文文献リスト

新文献管理番号	掲載DB	PMID・医中誌ID	著者	文献表題	Citation	雑誌名（略誌名）	出版年	巻、号、ページ	doi	文献の種類（○：総説）	PubMed URL	重要度	概要	分析技術、治療（OITなど）、最新情報（ゲノム、プロテオームなど）、症例報告、学会要旨、動物実験は、原則入手不要	コメント
001	PubMed	38984290	Torii A, Seki Y, Sasano R, Ishida Y, Nakamura K, Ito R, Iwasaki Y, Iijima K, Akiyama H.	Development of a rapid and reliable method to simultaneously detect seven food allergens in processed foods using LC-MS/MS	Food Chem X. 2024 Jun 14;23:101558. doi: 10.1016/j.fochx.2024.101558. eCollection 2024 Oct 30.	Food Chem X	2024	23:101558	10.1016/j.fochx.2024.101558		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38984290/	×	LC-MS/MSを用いて加工食品中の食物アレルゲンタンパク質7種（小麦、そば、牛乳、卵、甲殻類、落花生、クルミ）を同時に検出する迅速かつ信頼性の高い方法を開発。サスペンショントラッピング（S-Trap）カラムとオンライン自動固相抽出を使用した方法により、微量のアレルゲンタンパク質を添加した5種類のサンプル中の7種類の食品成分由来の特定のタンパク質に対するマーカーペプチドの同時検出が可能になった。各タンパク質に対する本方法の検出限界値は1 mg/kg未満と推定された。	分析技術	
002	PubMed	39083591	Castromil-Benito ES, Betancor D, Parrón-Ballesteros J, Bueno-Díaz C, Gutiérrez-Díaz G, Turnay J, Heras ML, Cuesta-Herranz J, Villalba M, Pastor-Vargas C.	Walnut Jug r 1 is Responsible for Primary Sensitization among Patients Suffering Walnut-Hazelnut 2S Albumin Cross-Reactivity	J Agric Food Chem. 2024 Aug 14;72(32):18162-18170. doi: 10.1021/acs.jafc.4c03603. Epub 2024 Jul 31.	J Agric Food Chem	2024	72(32):18162-18170	10.1021/acs.jafc.4c03603		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/39083591/	○	くるみとヘーゼルナッツの交差反応性を、どちらか一方または両方にアレルギーがあり、それらの2Sアルブミンに感作された20人の患者で評価した。イムノブロット分析では、患者の85%が重篤な症状の発現に関連するクルミの2SアルブミンであるJug r 1を認識し、50%がヘーゼルナッツの2SアルブミンであるCor a 14を認識した。阻害ELISAにより、Jug r 1はCor a 14特異的IgEの結合を強く阻害したが、Cor a 14はJug r 1特異的IgEの結合を部分的に阻害した。この結果から、くるみ/ヘーゼルナッツの2Sアルブミンに感作された患者は均質な集団ではないことが示された。くるみ2Sアルブミンの特異的エピトープに感作される患者と、くるみとヘーゼルナッツの交差反応性エピトープに感作される患者が存在し、Jug r 1が主要な感作物質であった。	くるみーヘーゼルナッツの交差性に因るアレルギー患者におけるJug r 1の重要性	くるみとの交差性に関する研究 Jug r 1が重要
003	PubMed	38976236	Ortega-Martin L, Fernández-Bravo S, Nuñez-Borque E, Esteban V, Pastor-Vargas C, de Las Heras M, Sastre J, Cuesta-Herranz J.	Age and Geographical Location Determine the Molecular Pattern of Walnut Allergy in Madrid, Spain	J Investig Allergol Clin Immunol. 2024 Jul 8:0. doi: 10.18176/jiaci.1005. Online ahead of print.	J Investig Allergol Clin Immunol	2024	34(5):341-343	10.18176/jiaci.1005		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38976236/	○	Jug r 1に感作された患者は通常小児（16歳未満）で、最も重篤な反応を経験した。多くの場合、くるみは隠れたアレルゲンであり、アレルギーはくるみまたは他のナッツ類に限定されていた。対照的に、LTPに感作された患者は、口腔アレルギー症候群を示すことが多かったが、かなりの症例が全身反応を経験した。くるみアレルギーがLTP症候群の最初の発現として現れる一方で、関連する症例では果物（特にバラ科）により症状が誘発された。興味深いことに、LTPに感作された患者のみが補因子に関連した反応を示した。 クルミアレルギーの分子パターンは2つの要因によって決定された。第一は発症年齢である。小児期は、地理的な場所に関係なくクルミに対する感作パターンを決定し、世界中でSSP、特にJug r 1に対する感作が優勢である[5-13]。2つ目の要因は地理的なもので、成人期の分子パターンを決定し、地中海地域ではLTPに対する感作が、北部および中央ヨーロッパではJug r 5に対する感作が条件となる[6,7]。この2つの要因が、発表された研究結果の食い違いを説明していると考えられる。 発症年齢と地理的位置が支配的な分子パターンを決定し、分子パターンがクルミアレルギーの特徴を決定した。	くるみアレルギーの分子パターンと年齢、地域との関連性（スペイン）	海外文献だが、CRDの結果として内容確認
004	PubMed	39016336	De Agrela-Mendes I, Pedrosa M, Gómez-Traseira C, Phillips-Anglés E, Rodriguez-Álvarez M, Quirce S.	Tolerance of peanuts and tree nuts in Spanish children with exclusive sensitization to lipid transfer proteins	Pediatr Allergy Immunol. 2024 Jul;35(7):e14204. doi: 10.1111/pai.14204.	Pediatr Allergy Immunol	2024	35(7):e14204	10.1111/pai.14204		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/39016336/	○	LTP に感作された小児におけるピーナッツと木の実 (ヘーゼルナッツとくるみ) の耐性を評価した。 方法: ピーナッツ、ヘーゼルナッツ、またはくるみに対するアレルギーと診断された個人を登録した。データは、人口統計および病歴を含む医療記録から収集した。評価は、市販の抽出物と問題のナッツを使用した皮膚プリックテスト、およびナッツとその主要な成分に対する総 IgE と特異的 IgE の測定、種子貯蔵タンパク質に対する感作がないものの、LTP 感作が陽性の参加者は、オープンOFCを実施した。 結果: ピーナッツアレルギーと分類された 75 名、ヘーゼルナッツアレルギーと分類された 44 名、くるみアレルギーと分類された 51 名を対象とした。全員が原因ナッツによるオープンOFCを受け、高い耐性率を示した。ピーナッツは患者の 98.6%、ヘーゼルナッツは 97.72%、クルミは 84.3% が耐性を示した。	自然経過（アレルゲン）	海外文献だが、自然経過の結果として内容確認
005	PubMed	38970259	Miralles-Lopez JC, Carbonell-Martinez A, Zamarro-Parra S, Navarro-Garrido C, Escudero-Pastor AI, Boulaich M, Sanromán-Sirvent S, Petryk-Petryk Y, Ladrón-de-Guevara MD, Pérez-Fernández V.	Clinical and serological characteristics of patients allergic to LTP	Allergol Immunopathol (Madr). 2024 Jul 1;52(4):9-14. doi: 10.15586/aei.v52i4.1074. eCollection 2024.	Allergol Immunopathol (Madr)	2024	52(4):9-14	10.15586/aei.v52i4.1074		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38970259/	○	LTP症候群患者の臨床および感作プロファイル、重症度の臨床パターン 材料と方法 ：スペインのムルシアにあるレイナ・ソフィア病院のLTPアレルギー相談室で行われた。患者の特徴、反応、補因子、関与する食物、QOL、食物および航空アレルゲンに対する皮膚プリックテスト、および血清学的パラメータを分析した。 結果：LTPアレルギーと診断された患者236例のうち、54.66%がアナフィラキシー、36.02%が蕁麻疹血管浮腫、9.32%が口腔アレルギー症候群であった。最も多く関与した食物はモモで、70%の患者に症状を引き起こし、次いでくるみ55%、ピーナッツ45%、ヘーゼルナッツ44%、リンゴ38%であった。アナフィラキシーを誘発した食物については、くるみが最も多く、次いでモモ、ピーナッツ、ヘーゼルナッツ、アーモンド、ヒマワリの種、リンゴであった。	LTP症候群	くるみのLTP（Jug r 3）は重要
006	PubMed	38529801	Sato S, Ebisawa M.	Precision allergy molecular diagnosis applications in food allergy	Curr Opin Allergy Clin Immunol. 2024 Jun 1;24(3):129-137. doi: 10.1097/ACI.0000000000000977. Epub 2024 Mar 26.	Curr Opin Allergy Clin Immunol	2024	24(3):129-137	10.1097/ACI.0000000000000977	○	https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38529801/	×	最近の知見: 成分分解診断 (CRD) は、症状に基づいてアレルゲンに対する感作を調べ、アレルギー患者の共感作および/または交差感作を明らかにするために使用できる。以下のアレルゲン成分が症状と関連することが知られている: 卵のオボムコイド、小麦のオメガ 5 グリアジン、および多くの貯蔵タンパク質 (大豆の Gly m 8、ピーナッツの Ara h 2、ヘーゼルナッツの Cor a 14、カシューナッツの Ana o 3、くるみの Jug r 1、およびゴマの Ses i 1)。 マカダミアナッツ (Mac i 1 および Mac i 2)、アーモンド (Pru du 6)、魚 (パルブアルブミンおよびコラーゲン)、およびエビ (Pem m 1 および Pem m 14) のアレルゲンに関する最近の研究では、CRD に関する追加情報が得られている。さらに、Pru p 7 は桃に対する全身反応の危険因子であり、最近ではヒノキやスギの花粉と交差反応することが明らかになっている。	食物アレルギー診断精度	
007	PubMed	38194791	Civera A, Esteban C, Mata L, Sánchez L, Galan-Malo P, Pérez MD.	Sensitive ELISA and lateral flow immunoassay for the detection of walnut traces in processed food and working surfaces	Food Chem. 2024 May 30;441:138296. doi: 10.1016/j.foodchem.2023.138296. Epub 2023 Dec 29.	Food Chem	2024	441:138296	10.1016/j.foodchem.2023.138296		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38194791/	×	くるみを検出するために、Jug r 1 の測定に基づくサンドイッチ ELISA とラテラルフロー免疫測定法 (LFIA) が開発された。試験した 88 種類の食品成分のうち、交差反応性はペカンナッツでのみ確認された。ELISA と LFIA は、くるみ抽出物を添加した複合食品マトリックスで、それぞれ 0.25 μg/g と 0.5 μg/g のくるみタンパク質を検出できた。さらに、ELISA と LFIA によって、粉砕したくるみを添加したブレンド食品 (チョコレート) と加工食品 (アイスクリームとパン) で、それぞれ 0.5 μg/g と 1.5 μg タンパク質/g のくるみが検出された。LFIA は、作業面でも 0.1 μg のくるみタンパク質を検出できた。ELISA は許容できる精度と高い回収率 (71-97 %) を示し、両方の試験は堅牢であった。	分析技術	
008	PubMed	38781930	Kwong KY, Chen Z, Scott L, Hilborne LH.	Optimizing Identification of Allergic Sensitization to Seasonal Inhalant Allergens in the USA: Implications for Constructing Optimal Panels to Evaluate Patients with Allergy	Int Arch Allergy Immunol. 2024 May 23:1-8. doi: 10.1159/000538420. Online ahead of print.	Int Arch Allergy Immunol	2024	185(9):848-855	10.1159/000538420		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38781930/	×	米国の大規模な臨床参照ラボの空中アレルゲン検査データを分析して、季節性アレルゲン検査の選択を最適化するためのガイダンスを提供	季節性吸入アレルギー	
009	PubMed	38759790	Windom RR, Seitz S, Ly JB, Dunn N, Fergeson J, Windom HH.	Food Sublingual Immunotherapy: Safety and Simplicity of a Real Food Updosing Protocol	J Allergy Clin Immunol Pract. 2024 May 15:S2213-2198(24)00519-1. doi: 10.1016/j.jaip.2024.05.007. Online ahead of print.	J Allergy Clin Immunol Pract	2024	12(9):2447-2453.e1	10.1016/j.jaip.2024.05.007		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38759790/	×	実際の食品を使用した、費用対効果の高い迅速な 舌下免疫療法プロトコルを提案	舌下OIT（予防、治療）	
010	PubMed	38727626	Pasioti M, Xepapadaki P, Mathioudakis AG, Lakoumentas J, Efstathiou E, Papadopoulos NG.	Current options in the management of tree nut allergy: A systematic review and narrative synthesis	Pediatr Allergy Immunol. 2024 May;35(5):e14132. doi: 10.1111/pai.14132.	Pediatr Allergy Immunol	2024	35(5):e14132	10.1111/pai.14132	○	https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38727626/	○	IgE 介在性の木の実アレルギー患者の脱感作に対する潜在的な治療オプションを評価するために、2024 年 1 月までに発表された研究について 3 つのデータベースを体系的に検索	木の実アレルギー総説	木の実アレルギーの最新レビュー
011	PubMed	38283084	Dadha P, Nimmagadda S, Venter C, Gupta R, Kumar PU, Warren CM.	Reported food-related symptoms and food allergen sensitization in a selected adult population in Hyderabad, India: A hospital-based survey	J Allergy Clin Immunol Glob. 2023 Dec 23;3(2):100204. doi: 10.1016/j.jacig.2023.100204. eCollection 2024 May.	J Allergy Clin Immunol Glob	2023	3(2):100204	10.1016/j.jacig.2023.100204		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38283084/	×	皮膚プリック検査と特異的IgE検査で、Hyderabadでよく見られる食品を特定し、アトピー性疾患の誘因となる食品に対するアレルギー感作率を評価 1622人の患者（平均年齢42.6±12.9歳、男性55.5%）のうち、喘息が最も多く診断されたアトピー性疾患（26.4%）で、痒みや発疹が頻繁に報告された症状（22.7%）であった。患者の94.9%は血清総IgE値が144 kU/Lを超えていた。ひよこ豆、キャベツ、ナス、くるみ、クミン、キンマの葉が最も多く報告された誘発食品でした。	インド成人FA調査	
012	PubMed	38091784	Ma J, Tong P, Chen Q, Liu J, Li H, Long F.	Covalent conjugation with polyphenol reduced the sensitization of walnut and ameliorated allergy by enhancing intestinal epithelial barrier in mice	Food Chem. 2024 May 1;439:138191. doi: 10.1016/j.foodchem.2023.138191. Epub 2023 Dec 9.	Food Chem	2024	439:138191	10.1016/j.foodchem.2023.138191		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38091784/	×	クルミタンパク質（WP）の感作を軽減するために、WPと（-）-エピガロカテキンガレート（EGCG）、ケルセチン、トランスフェルラ酸、およびレスベラトロールとの相互作用の影響をマウスモデルで検討	動物実験	
013	PubMed	38612981	Gutiérrez-Díaz G, Betancor D, Parrón-Ballesteros J, Gordo RG, Castromil-Benito ES, Haroun E, Vázquez de la Torre M, Turnay J, Villalba M, Cuesta-Herranz J, Pastor-Vargas C.	Identification of New Allergens in Macadamia Nut and Cross-Reactivity with Other Tree Nuts in a Spanish Cohort	Nutrients. 2024 Mar 26;16(7):947. doi: 10.3390/nu16070947.	Nutrients	2024	16(7):947	10.3390/nu16070947		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38612981/	○	オーストラリア人と日本人の患者で2つのMacadamia integrifoliaアレルゲン（Mac i 1とMac i 2）が特定されているが、西ヨーロッパの集団、特にスペインにおけるアレルギー感作パターンは不明である。スペインでマカダミアナッツアレルギー患者7名を募集し、マカダミアナッツタンパク質抽出物を調製し、ヘーゼルナッツおよびくるみ抽出物とともに、ウェスタンブロット法および阻害試験を実施した。交差反応性では、ヘーゼルナッツ抽出物はマカダミアナッツのオレオシン特異的 IgE 結合を阻害したが、クルミ抽出物は阻害しなかったことから、オレオシンがマカダミアナッツとヘーゼルナッツの交差反応性のマーカーとして使用できることを示唆している。結果は、スペインの集団におけるアレルギー性プロファイルが、オーストラリアと日本の集団で以前に検出されたものとは異なることを示している。	アレルゲン、交差性：マカダミアナッツの新規アレルゲンの同定及び木の実との交差反応性－スペインコホート	マカダミアナッツと他の木の実類との交差反応性 スペインの研究だが内容を確認
014	PubMed	38407394	Wood RA, Togias A, Sicherer SH, Shreffler WG, Kim EH, Jones SM, Leung DYM, Vickery BP, Bird JA, Spergel JM, Iqbal A, Olsson J, Ligueros-Saylan M, Uddin A, Calatroni A, Huckabee CM, Rogers NH, Yovetich N, Dantzer J, Mudd K, Wang J, Groetch M, Pyle D, Keet CA, Kulis M,	Omalizumab for the Treatment of Multiple Food Allergies	N Engl J Med. 2024 Mar 7;390(10):889-899. doi: 10.1056/NEJMoa2312382. Epub 2024 Feb 25.	N Engl J Med	2024	390(10):889-899	10.1056/NEJMoa2312382		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38407394/	×	複数の食物アレルギーを持つ 1 歳の幼児の場合、16 週間のオマリズマブ治療は、ピーナッツやその他の一般的な食物アレルゲンに対する反応閾値の上昇においてプラセボよりも優れていました。	治療（オマリズマブ）	
015	PubMed	37703777	Holcombe G, Walker MJ, Singh M, Gray K, Cowen S, Ellison SLR, Rogers A, Balasundaram A, Burns M, Clare Mills EN.	Clinically and industrially relevant incurred reference materials to improve analysis of food allergens, milk, egg, almond, hazelnut and walnut	Food Chem. 2024 Feb 15;434:137391. doi: 10.1016/j.foodchem.2023.137391. Epub 2023 Sep 4.	Food Chem	2024	434:137391	10.1016/j.foodchem.2023.137391		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37703777/	×	5 種の優先的アレルゲンについて、コンセンサスに基づいた産業的および臨床的に関連する初のマルチアレルゲン マトリックス RM キットの準備と特性評価を実施した。	分析技術	
016	PubMed	37792850	Spolidoro GCI, Lisik D, Nyassi S, Ioannidou A, Ali MM, Amera YT, Rovner G, Khaleva E, Venter C, van Ree R, Worm M, Vlieg-Boerstra B, Sheikh A, Muraro A, Roberts G, Nwaru BI.	Prevalence of tree nut allergy in Europe: A systematic review and meta-analysis	Allergy. 2024 Feb;79(2):302-323. doi: 10.1111/all.15905. Epub 2023 Oct 4.	Allergy	2024	79(2):302-323	10.1111/all.15905	○	https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37792850/	○	個々の木の実に対する木の実アレルギー/感作の有病率。 ヘーゼルナッツ、くるみ、アーモンド、および少数のケースではカシューナッツとブラジルナッツのメタアナリシス。生涯自己申告有病率は、ヘーゼルナッツでは 0.8% (95% CI 0.5-1.1)、くるみでは 0.4% (0.2-0.9) でした。時点自己申告有病率は、ヘーゼルナッツでは 4.0% (2.9-5.2)、ブラジルナッツでは 3.4% (2.0-4.9)、アーモンドでは 2.0% (1.1-2.9)、くるみでは 1.8% (1.1-2.5) であった。食物負荷試験で確認された TNA の時点有病率は、ヘーゼルナッツでは 0.04% (0.0-0.1)、くるみでは 0.02% (0.01-	ヨーロッパにおける木の実アレルギー患者の有病割合	ヨーロッパの木の実アレルギーの感作率、有病割合、OFCによる有病割合 海外文献だが、内容を確認
017	PubMed	37467671	Kim K, Kim Y, Lee H, Lee C, Kim S, Oh S, Park ZY.	Discovery, verification, and validation of walnut protein marker peptides using LC-MS approaches	Food Chem. 2023 Dec 15;429:136889. doi: 10.1016/j.foodchem.2023.136889. Epub 2023 Jul 16.	Food Chem	2023	429:136889	10.1016/j.foodchem.2023.136889		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37467671/	×	2014年、欧州アレルギー・臨床免疫アカデミー（EAACI）は、2000年から2012年に発表された研究について、欧州における食物アレルギー（FA）と食物感作の有病率をまとめた初のシステマティックレビューを発表した。システマティックレビューの最新の更新では、個々の木の実に対する木の実アレルギー/感作の有病率をまとめた。 2012年から2021年に発表された関連論文について6つのデータベースを検索し、2000年から2012年の間に既に特定されていた15の研究に17の研究を追加して、合計32の研究となった。 調査した木の実のうち、ヘーゼルナッツ、くるみ、アーモンド、および少数のケースではカシューナッツとブラジルナッツのメタ解析が可能であった。 生涯自己申告有病率は、ヘーゼルナッツでは 0.8% (95% CI 0.5-1.1)、くるみでは 0.4% (0.2-0.9) であった。時点自己申告有病率は、ヘーゼルナッツでは 4.0% (2.9-5.2)、ブラジルナッツでは 3.4% (2.0-4.9)、アーモンドでは 2.0% (1.1-2.9)、くるみでは 1.8% (1.1-2.5) であった。食物負荷試験で確認された時点有病率は、ヘーゼルナッツでは 0.04% (0.0-0.1)、くるみでは 0.02% (0.01-0.1) であった。	分析技術	
018	PubMed	37641460	Lokya V, Parmar S, Pandey AK, Sudini HK, Huai D, Ozias-Akins P, Foyer CH, Nwosu CV, Karpinska B, Baker A, Xu P, Liao B, Mir RR, Chen X, Guo B, Nguyen HT, Kumar R, Bera SK, Singam P, Kumar A, Varshney RK, Pandey MK.	Prospects for developing allergen-depleted food crops	Plant Genome. 2023 Dec;16(4):e20375. doi: 10.1002/tpg2.20375. Epub 2023 Aug 28.	Plant Genome	2023	16(4):e20375	10.1002/tpg2.20375	○	https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37641460/	×	主にピーナッツ、木の実、小麦、大豆、インゲン豆に関連するアレルギーの蔓延に焦点を当て、それらの生理学的特性と機能を強調するとともに、アレルゲン遺伝子発現を調整するための研究の方向性を検討します。特に、分子育種、遺伝子工学、ゲノム編集の最近の進歩をどのように利用して、消費者の健康を守る可能性のある低アレルゲン食用作物を開発できるかについて解説。	総説：アレルゲン除去食用作物開発	アレルゲンに関する記載はあるが、他の総説を参照する。
019	PubMed	38024848	Kitamura K, Matsui T, Takasato Y, Sugiura S, Ito K.	Jug r 1 sensitization in 0- to 35-month-old children with egg, milk, or wheat sensitization	J Allergy Clin Immunol Glob. 2023 Sep 14;2(4):100168. doi: 10.1016/j.jacig.2023.100168. eCollection 2023 Nov.	J Allergy Clin Immunol Glob	2023	2(4):100168	10.1016/j.jacig.2023.100168		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/38024848/	○	方法: 卵白、牛乳、小麦に対する特異的 IgE 検査で陽性となり、くるみを摂取したことがない 0 ～ 35 か月児を対象に、Jug r 1 特異的 IgE スクリーニングを、2018 年 11 月～2022 年 12 月に実施した。 結果: 205 名の小児 (うち 125 名は男児) における Jug r 1 特異的 IgE 陽性率 (レベル > 0.34 kUA/L) は 9.8% で、陽性を示した患者の Jug r 1 特異的 IgE レベルの中央値は 12.5 kUA/L であった。湿疹は 119 名の患者 (58%) に認められた。湿疹陽性群 (15.1% [119 名中 18 名]) の Jug r 1 特異的 IgE 陽性率は、湿疹陰性群 (2.3% [86 名中 2 名]) よりも有意に高く (P = .002)、湿疹陽性群では、感作抗原あたりの Jug r 1 特異的 IgE 陽性率は、卵では 13.7%、牛乳では 17.0%、小麦では 17.1% であった。重度の湿疹群 (26.6% [64 件中 17 件]) の Jug r 1 特異的 IgE 陽性率は、非重度の湿疹群 (1.8% [55 件中 1 件]) よりも有意に高かった (P < .001)。 結論: 3 歳未満の子供でも、卵、牛乳、小麦に感作された湿疹のある子供の 15% が Jug r 1 に感作されていた。	卵、牛乳、小麦アレルギー児のJug r 1感作（日本）	日本の研究 重度の湿疹患者群でJug r 1特異的IgE抗体価が高い
020	PubMed	37723909	Präger L, Simon JC, Treudler R.	Food allergy - New risks through vegan diet? Overview of new allergen sources and current data on the potential risk of anaphylaxis	J Dtsch Dermatol Ges. 2023 Nov;21(11):1308-1313. doi: 10.1111/ddg.15157. Epub 2023 Sep 18.	J Dtsch Dermatol Ges	2023	21(11):1308-1313	10.1111/ddg.15157	○	https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37723909/	○	ビーガン食品に含まれるアレルゲンと新たなアレルゲン源の概要を示し、ビーガン食のアナフィラキシーリスクに焦点を当て解説。。	ビーガン食品のアレルゲン／アナフィラキシー	ビーガン食全体のレビューのため、くるみの記載はわずか？？？
021	PubMed	37393135	Yasudo H, Yamamoto-Hanada K, Mikuriya M, Ogino F, Fukuie T, Ohya Y.	Association of walnut proteins in household dust with household walnut consumption and Jug r 1 sensitization	Allergol Int. 2023 Oct;72(4):607-609. doi: 10.1016/j.alit.2023.06.003. Epub 2023 Jun 29.	Allergol Int	2023	72(4):607-609	10.1016/j.alit.2023.06.003		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37393135/	○	家庭内のほこりに含まれるくるみタンパク質の量が、家庭でのくるみの消費と Jug r 1 に対する感作の進行に関係している可能性を示唆。	くるみ摂取／ハウスダスト中のくるみタンパク質と感作	エアロアレルゲンとしてのJug r 1の重要性
022	PubMed	37744961	Limão R, Bartolomé B, Cabral Duarte F.	The relevance of oral food challenge in a patient allergic to peanut and tree nuts	Asia Pac Allergy. 2023 Sep;13(3):132-134. doi: 10.5415/apallergy.0000000000000109. Epub 2023 Sep 7.	Asia Pac Allergy	2023	13(3):132-134	10.5415/apallergy.0000000000000109		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37744961/	○	4 歳のときにピーナッツを摂取してから 20 分後に唇と口の中が痒くなり、全身性じん麻疹と眼瞼血管性浮腫が 1 回発生した 12 歳の男児の症例を報告しています。免疫アレルギー学的研究により、ピーナッツ、ピスタチオ、カシューナッツに対する同時アレルギーの存在が明らかになり、これらの TN を食べたことのない小児で、医師の監督下での経口食物負荷試験 (OFC) により確認されました。これらの食品に対する特異的 IgE (sIgE) は陰性でしたが、市販の抽出物による皮膚プリックテスト (SPT) が陽性であったことで、IgE 介在性過敏症のメカニズムが実証されました。	ピーナッツ、木の実アレルギー経口負荷試験	症例報告だが、OFC、交差性について記載されていることから、元文献の内容を確認。
023	PubMed	37771674	Keet C, Sicherer SH, Bunyavanich S, Visness C, Fulkerson PC, Togias A, Davidson W, Perry S, Hamrah S, Calatroni A, Robinson K, Dunaway L, Davis CM, Anvari S, Leong-Kee SM, Hershey GK, DeFranco E, Devonshire A, Kim H, Joseph C, Davidson B, Strong NK, Tsuang AJ, Groetch	The SunBEAm birth cohort: Protocol design	J Allergy Clin Immunol Glob. 2023 Aug;2(3):100124. doi: 10.1016/j.jacig.2023.100124. Epub 2023 Jun 3.	J Allergy Clin Immunol Glob	2023	2(3):100124	10.1016/j.jacig.2023.100124		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37771674/	×	登録進行中の試験プロトコル	アメリカ出生コホートの試験経計画	
024	PubMed	37330426	Crimmins TM, Vogt E, Brown CL, Dalan D, Manangan A, Robinson G, Song Y, Zhu K, Katz DSW.	Volunteer-contributed observations of flowering often correlate with airborne pollen concentrations	Int J Biometeorol. 2023 Aug;67(8):1363-1372. doi: 10.1007/s00484-023-02506-3. Epub 2023 Jun 17.	Int J Biometeorol	2023	67(8):1363-1372	10.1007/s00484-023-02506-3		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37330426/	×	Nature's Notebook に提供されている花と花粉の塊の状態の観察が、空中花粉濃度の効果的なプロキシとして機能できるかどうかを評価。	花粉関連調査	
025	PubMed	37393294	Zhu WZ, Perkins S.	A case report of acute food protein-induced enterocolitis syndrome to walnut	Allergy Asthma Clin Immunol. 2023 Jul 1;19(1):57. doi: 10.1186/s13223-023-00812-4.	Allergy Asthma Clin Immunol	2023	19(1):57	10.1186/s13223-023-00812-4		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37393294/	×	くるみによるFood protein-induced enterocolitis syndrome (FPIES)の所例報告	くるみ誘発消化管アレルギー（症例報告）	FPIESはFSでは記載しない
026	PubMed	37334468	Şahin M, Arioglu-Tuncil S, Ünver A, Deemer D, Lindemann SR, Tunçil YE.	Dietary Fibers of Tree Nuts Differ in Composition and Distinctly Impact the Fecal Microbiota and Metabolic Outcomes In Vitro	J Agric Food Chem. 2023 Jun 28;71(25):9762-9771. doi: 10.1021/acs.jafc.3c01415. Epub 2023 Jun 19.	J Agric Food Chem	2023	71(25):9762-9771	10.1021/acs.jafc.3c01415		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37334468/	×	木の実（アーモンド、カシューナッツ、ヘーゼルナッツ、ピスタチオ、クルミ）の食物繊維（DF）が腸内細菌叢に及ぼす影響をin vitroで評価。 カシュー繊維は、酪酸産生細菌をより高い相対存在比で促進した。促進の程度はナッツの種類に依存するものの、ナッツ繊維は一般に結腸内の有益な微生物を促進する能力がある。	木の実繊維成分の腸内細菌に及ぼす影響	木の実繊維成分の腸内細菌に及ぼす影響。カシューナッツがベスト。
027	PubMed	37545822	Łyżwa K, Chojnowska-Wójtowicz M, Zielińska J, Zagórska W, Kulus M, Grzela K.	Sensitization to nut allergens in children with food allergy and other atopic diseases - just a coexistence?	Postepy Dermatol Alergol. 2023 Jun;40(3):402-410. doi: 10.5114/ada.2023.128991. Epub 2023 Jul 16.	Postepy Dermatol Alergol	2023	40(3):402-410	10.5114/ada.2023.128991		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37545822/	×	アトピー性アレルギー疾患を有する／有しない小児における特定のナッツに対する感作。 材料と方法: 食物アレルギーと診断された 598 名の小児を対象として、ヘーゼルナッツ、ピーナッツ、くるみの主要なアレルゲンに対する感作のスクリーニングを実施。 結果: 食物アレルギーのある子供の約 77.8% が、少なくとも 1 つの同時性アトピー性疾患を呈していた: アレルギー性鼻炎 (52.9%)、アトピー性皮膚炎 (48%)、または喘息 (31.4%)。ナッツ特異的IgE抗体は、子供の 67% で確認された。感作の発生は年齢グループによって異なり、臨床診断にも依存した。	アトピー性疾患とナッツ感作	くるみに関する記述が少ない。
028	PubMed	37228443	Indolfi C, Dinardo G, Klain A, Contieri M, Umano GR, Decimo F, Abbadessa S, Vitulano C, Ciprandi G, Miraglia Del Giudice M.	Sensitization to nsLTP: A Retrospective Study in An Italian Pediatric Population over the Last Decade	J Immunol Res. 2023 May 16;2023:4053799. doi: 10.1155/2023/4053799. eCollection 2023.	J Immunol Res	2023	2023:4053799	10.1155/2023/4053799		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37228443/	○	nsLTP に対する感作に関する過去 10 年間のイタリアの小児集団における後方視的研究 1 歳から 18 歳までの 800 名の子供を対象に、過去 11 年間にイタリアの小児集団を対象として、非特異的 LTP の 8 つの異なる分子の有病率を経時的に調査。 結果: 試験集団の約 52% が少なくとも 1 つの LTP 分子に感作されていた。分析したすべての LTP について、感作は時間の経過とともに増加した。特に、2010 年から 2020 年を比較すると、イギリス産くるみの Jug r 3、ピーナッツの Ara h 9、プラタナスの Pla a 3 の LTP で大きな増加が見られた (約 50%)。ヘーゼルナッツの Cor a 8 の LTP の増加は約 36%、ヨモギの Art v 3 の LTP の増加は約 30% であった。	nsLTP疫学調査（イタリア小児）	経年的なLTP感作率の増加 海外文献だが内容を確認
029	PubMed	37240577	Pasioti M, Savva M, Lakoumentas J, Kompoti E, Makris M, Xepapadaki P, Papadopoulos NG.	Impact of Presumed Tree Nut and Peanut Allergy on Quality of Life at Different Ages	J Clin Med. 2023 May 15;12(10):3472. doi: 10.3390/jcm12103472.	J Clin Med	2023	12(10):3472	10.3390/jcm12103472		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37240577/	○	木の実やピーナッツのアレルギー患者のQOLに及ぼす年齢やナッツやピーナッツの種類の影響	木の実、ピーナッツアレルギーのQOL	QOLに関する記載の取扱い
030	PubMed	37073136	Parlak Z, Soyer O, Sahiner UM, Sekerel BE.	Characteristics of tree nut, peanut, and seed consumption in the eastern Mediterranean region	Nutr Health. 2023 Apr 18:2601060231170250. doi: 10.1177/02601060231170250. Online ahead of print.	Nutr Health	2023	2601060231170250	10.1177/02601060231170250		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37073136/	×	トルコでの調査 木の実、種子を食べなかった割合は、健常乳児＞FA乳児	木の実摂取とアレルギー（トルコ）	
031	PubMed	36736958	Erdle SC, Cook VE, Cameron SB, Yeung J, Kapur S, McHenry M, Chan ES, Mak R, Rex GA, Wong T, Soller L.	Real-World Safety Analysis of Preschool Tree Nut Oral Immunotherapy	J Allergy Clin Immunol Pract. 2023 Apr;11(4):1177-1183. doi: 10.1016/j.jaip.2023.01.031. Epub 2023 Feb 1.	J Allergy Clin Immunol Pract	2023	11(4):1177-1183	10.1016/j.jaip.2023.01.031		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/36736958/	×		木の実OIT（治療）	
032	PubMed	36974653	McWilliam VL, Koplin JJ, Allen K, Robinson M, Smart J, Loke P, Peters RL, Dang T, Lee KJ, Dalziel K, Tey D, Taranto M, Perrett KP.	TreEAT trial: Protocol for a randomized controlled trial investigating the efficacy and safety of early introduction of tree nuts for the prevention of tree nut allergy in infants with peanut allergy	Pediatr Allergy Immunol. 2023 Mar;34(3):e13930. doi: 10.1111/pai.13930.	Pediatr Allergy Immunol	2023	34(3):e13930	10.1111/pai.13930		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/36974653/	×		TreEAT trialプロトコル	
033	PubMed	36509409	Nachshon L, Schwartz N, Levy MB, Goldberg MR, Epstein-Rigbi N, Katz Y, Elizur A.	Factors associated with home epinephrine-treated reactions during peanut and tree-nut oral immunotherapy	Ann Allergy Asthma Immunol. 2023 Mar;130(3):340-346.e5. doi: 10.1016/j.anai.2022.12.001. Epub 2022 Dec 9.	Ann Allergy Asthma Immunol	2023	130(3):340-346	10.1016/j.anai.2022.12.001		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/36509409/	×		木の実OIT中のエピネフリン使用	
034	PubMed	36728846	Foo ACY, Nesbit JB, Gipson SAY, DeRose EF, Cheng H, Hurlburt BK, Kulis MD, Kim EH, Dreskin SC, Mustafa S, Maleki SJ, Mueller GA.	Structure and IgE Cross-Reactivity among Cashew, Pistachio, Walnut, and Peanut Vicilin-Buried Peptides	J Agric Food Chem. 2023 Feb 15;71(6):2990-2998. doi: 10.1021/acs.jafc.2c07061. Epub 2023 Feb 2.	J Agric Food Chem	2023	71(6):2990-2998	10.1021/acs.jafc.2c07061		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/36728846/	○	ビシリンアレルゲンAra h 1、Ana o 1、Jug r 2、およびPis v 3のN末端から免疫グロブリンE（IgE）エピトープの同定。 遠い進化の起源にもかかわらず、合併症と交差反応性を理解するのに役立つ可能性がある。	交差性：カシューナッツ、ピスタチオ、くるみ、ピーナッツ	ビシリンの交差性に関する研究
035	PubMed	37780101	Mvoundza Ndjindji O, Minto'o Rogombe S, Mougola Bissiengou P, Mveang-Nzoghe A, Leboueny M, Ouloungou Mbina, Maloupazoa Siawaya AC, KuissiKamgang E, Ndeboko B, Ategbo S, Djoba Siawaya JF.	Allergen sensitization and polysensitization pattern of adults and children in an urban Sub-Saharan African setting (Libreville, Gabon)	J Allergy Clin Immunol Glob. 2022 Dec 15;2(1):23-29. doi: 10.1016/j.jacig.2022.10.005. eCollection 2023 Feb.	J Allergy Clin Immunol Glob	2022	2(1):23-29	10.1016/j.jacig.2022.10.005		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37780101/	×		感作率（アフリカ）	
036	PubMed	37113037	Groetch M, Mudd K, Woch M, Schaible A, Gray BE, Babineau DC, Bird JA, Jones S, Kim EH, Lanser BJ, Poyser J, Rogers N, Shreffler W, Sicherer S, Spergel AKR, Spergel J, Vickery BP, Chinthrajah RS, Wood R.	Retail Food Equivalents for Post-Oral Immunotherapy Dosing in the Omalizumab as Monotherapy and as Adjunct Therapy to Multi-Allergen Oral Immunotherapy in Food-Allergic Children and Adults (OUtMATCH) Clinical Trial	J Allergy Clin Immunol Pract. 2023 Feb;11(2):572-580.e2. doi: 10.1016/j.jaip.2022.10.022. Epub 2022 Oct 28.	J Allergy Clin Immunol Pract	2023	11(2):572-580	10.1016/j.jaip.2022.10.022		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37113037/	×		治療：(OUtMATCH) Clinical Trial－OIT/オダリズマブ	
037	PubMed	36909898	Chojnowska-Wójtowicz M, Łyżwa K, Zielińska J, Zagórska W, Grzela K.	Prevalence of nut allergen sensitization among children in central Poland	Postepy Dermatol Alergol. 2023 Feb;40(1):40-46. doi: 10.5114/ada.2022.124730. Epub 2023 Feb 27.	Postepy Dermatol Alergol	2023	40(1):40-46	10.5114/ada.2022.124730		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/36909898/	○	ポーランドでのナッツ類感作率の関する調査 ナッツ全般に対する感作は小児の 67% に見られましたが、ヘーゼルナッツとピーナッツに対する感作が最も一般的であった (それぞれ全小児の 56% と 55%)。ヘーゼルナッツ、ピーナッツ、クルミ (2 つまたはすべて) に対する共感作は、グループ全体のほぼ半数に認められた。	ナッツ類感作率（ポーランド）	ポーランドの結果だが、交差性で使える可能性あり。内容確認
038	PubMed	36699117	Torii A, Seki Y, Arimoto C, Hojo N, Iijima K, Nakamura K, Ito R, Yamakawa H, Akiyama H.	Development of a simple and reliable LC-MS/MS method to simultaneously detect walnut and almond as specified in food allergen labelling regulations in processed foods	Curr Res Food Sci. 2023 Jan 14;6:100444. doi: 10.1016/j.crfs.2023.100444. eCollection 2023.	Curr Res Food Sci	2023	6:100444	10.1016/j.crfs.2023.100444		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/36699117/	×		分析技術	
039	PubMed	36698378	Kronfel CM, Cheng H, McBride JK, Nesbit JB, Krouse R, Burns P, Cabanillas B, Crespo JF, Ryan R, Simon RJ, Maleki SJ, Hurlburt BK.	IgE epitopes of Ara h 9, Jug r 3, and Pru p 3 in peanut-allergic individuals from Spain and the US	Front Allergy. 2023 Jan 9;3:1090114. doi: 10.3389/falgy.2022.1090114. eCollection 2022.	Front Allergy	2023	3:1090114	10.3389/falgy.2022.1090114		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/36698378/	○	米国とスペインにおけるピーナッツアレルギー患者におけるAra h 9と2つの相同LTP（クルミのJug r 3と桃のPru p 3）に対するIgE結合パターンの違いとアレルギー反応性の違いへの寄与 LTP の特定の領域は米国の被験者でより頻繁に認識されており、保存されており、交差反応の可能性がある	ピーナッツアレルギー患者のくるみ感作率（スペイン、アメリカ）	
040	PubMed	36647856	Özdemir E, Damadoğlu E, Karakaya G, Kalyoncu AF.	Prevalence and clinical features of pollen-food allergy syndrome in adults with seasonal allergic rhinitis	Eur Rev Med Pharmacol Sci. 2023 Jan;27(1):103-109. doi: 10.26355/eurrev_202301_30858.	Eur Rev Med Pharmacol Sci	2023	27(1):103-109	10.26355/eurrev_202301_30858		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/36647856/	×		季節性アレルギー性鼻炎 (SAR) の成人患者における PFAS（トルコ）	PFASはFS範囲外
041	PubMed	35749974	Linghu X, Wang R, Lu Y.	Smartphone-integrated fluorescent quenching immunochromatographic test strips designed for the determination of sesame allergens in food samples	Spectrochim Acta A Mol Biomol Spectrosc. 2022 Nov 5;280:121522. doi: 10.1016/j.saa.2022.121522. Epub 2022 Jun 17.	Spectrochim Acta A Mol Biomol Spectrosc	2022	280:121522	10.1016/j.saa.2022.121522		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/35749974/	×		分析技術	
042	Pubmed	37779534	Wood RA, Chinthrajah RS, Rudman Spergel AK, Babineau DC, Sicherer SH, Kim EH, Shreffler WG, Jones SM, Leung DYM, Vickery BP, Bird JA, Spergel JM, Kulis M, Iqbal A, Kaufman D, Umetsu DT, Ligueros-Saylan M, Uddin A, Fogel RB, Lussier S, Mudd K, Poyser J, MacPhee M, Veri M, Davidson W, Hamrah S, Long A, Togias A; OUtMATCH study team.	Protocol design and synopsis: Omalizumab as Monotherapy and as Adjunct Therapy to Multiallergen OIT in Children and Adults with Food Allergy (OUtMATCH)	J Allergy Clin Immunol Glob. 2022 Jul 21;1(4):225-232. doi: 10.1016/j.jacig.2022.05.006. eCollection 2022 Nov.	J Allergy Clin Immunol Glob	2022	1(4):225-232	10.1016/j.jacig.2022.05.006		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/37779534/	×		治療：OUtMATCH（OIT/オダリズマブ）	
043	Pubmed	35714843	Kalb B, Marenholz I, Jeanrenaud ACSN, Meixner L, Arnau-Soler A, Rosillo-Salazar OD, Ghauri A, Cibin P, Blümchen K, Schlags R, Hansen G, Seidenberg J, Keil T, Lau S, Niggemann B, Beyer K, Lee YA.	Filaggrin loss-of-function mutations are associated with persistence of egg and milk allergy	J Allergy Clin Immunol. 2022 Nov;150(5):1125-1134. doi: 10.1016/j.jaci.2022.05.018. Epub 2022 Jun 15.	J Allergy Clin Immunol	2022	150(5):1125-1134	10.1016/j.jaci.2022.05.018		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/35714843/	×		FLG LOF 変異と食物アレルギー反応との関連性	遺伝子変異は×
044	Pubmed	36030884	Cabrera CM.	Feasibility of the ALEX multiplex platform in the diagnosis of nut allergy from a Mediterranean population	Clin Chim Acta. 2022 Oct 1;535:112-119. doi: 10.1016/j.cca.2022.08.022. Epub 2022 Aug 27.	Clin Chim Acta	2022	535:112-119	10.1016/j.cca.2022.08.022		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/36030884/	×		分析技術	
045	Pubmed	35569245	Filep SC, Reid Black K, Smith BRE, Block DS, Kuklinska-Pijanka A, Bermingham M, Oliver MA, Thorpe CM, Schuhmacher ZP, Agah S, Wuenschmann S, Chapman MD.	Simultaneous quantification of specific food allergen proteins using a fluorescent multiplex array	Food Chem. 2022 Sep 30;389:132986. doi: 10.1016/j.foodchem.2022.132986. Epub 2022 Apr 18.	Food Chem	2022	389:132986	10.1016/j.foodchem.2022.132986		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/35569245/	×		分析技術	
046	Pubmed	36340020	Smeekens JM, Kesselring JR, Frizzell H, Bagley KC, Kulis MD.	Induction of food-specific IgG by Gene Gun-delivered DNA vaccines	Front Allergy. 2022 Sep 19;3:969337. doi: 10.3389/falgy.2022.969337. eCollection 2022.	Front Allergy	2022	3:969337	10.3389/falgy.2022.969337		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/36340020/	×		治療：DNAワクチン	
047	Pubmed	36119658	Ridolo E, Pucciarini F, Kihlgren P, Barone A, Nicoletta F, Peveri S, Montagni M, Incorvaia C.	Lipid transfer protein syndrome: How to save a life through careful education	World Allergy Organ J. 2022 Sep 5;15(9):100683. doi: 10.1016/j.waojou.2022.100683. eCollection 2022 Sep.	World Allergy Organ J	2022	15(9):100683	10.1016/j.waojou.2022.100683		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/36119658/	×		LTP症候群調査：アレルギー教育	アレルギーに関する教育、指導
048	Pubmed	35718284	Ducharme L, Gabrielli S, Clarke AE, Morris J, Gravel J, Lim R, Chan ES, Goldman RD, O'Keefe A, Gerdts J, Chu DK, Upton J, Hochstadter E, Bretholz A, McCusker C, Zhang X, Ben-Shoshan M.	Tree nut-induced anaphylaxis in Canadian emergency departments: Rate, clinical characteristics, and management	Ann Allergy Asthma Immunol. 2022 Sep;129(3):335-341. doi: 10.1016/j.anai.2022.06.008. Epub 2022 Jun 16.	Ann Allergy Asthma Immunol	2022	129(3):335-341	10.1016/j.anai.2022.06.008		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/35718284/	○	カナダ全土の小児（0~17歳）における木の実アレルギーに関する調査。2011年4月から2020年5月にかけて救急部門を受診した小児のデータを収集。 結果 アナフィラキシー3096例のうち、540例（17%）が木の実によるものであった。年齢中央値は5.2歳（四分位範囲2.5-9.5）、性別は65.4%が男性であった。全反応のうち7.0%が重篤。 アナフィラキシーの原因となった主な木の実は、カシューナッツ（32.8%）、ヘーゼルナッツ（20.0%）、くるみ（11.5%）。	木の実アナフィラキシー（カナダ）	カナダのみの結果だが、木の実によるアナフィラキシーを解析しているため、内容確認
049	Pubmed	35231713	Lu Y, Sun L, Li C, Wang X, Li W, Zhao T, Huang L, Wang Z.	Comparative mass spectrometry analysis of N-glycans from the glycoproteins of eight allergy-inducing plants	Food Chem. 2022 Aug 1;384:132440. doi: 10.1016/j.foodchem.2022.132440. Epub 2022 Feb 14.	Food Chem	2022	384:132440	10.1016/j.foodchem.2022.132440		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/35231713/	×		分析技術	
050	Pubmed	33884956	Ibáñez-Sandin MD, Rodriguez Del Rio P, Alvarado MI, Garcia BE, Garriga-Baraut T, Reche Frutos M, Escudero C, Ramirez Jiménez A, Vila L, Lasa EM, Blasco C, Marchán-Martin E, Martorell A, Sanchez-Garcia S, Rodriguez-Álvarez M, Infante S, Rodriguez Vazquez V, Olaguibel JM, Labrador-Horrillo M, Carrillo T; AFRUSEN Task Force, Pediatric Allergy Committee, Spanish Society of Allergy and Clinical Immunology (SEAIC).	Onset of Nut Allergy in a Pediatric Cohort: Clinical and Molecular Patterns in the AFRUSEN Study	J Investig Allergol Clin Immunol. 2022 Jul 22;32(4):270-281. doi: 10.18176/jiaci.0696. Epub 2021 Apr 22.	J Investig Allergol Clin Immunol	2022	32(4):270-281	10.18176/jiaci.0696		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/33884956/	○	スペインでの木の実アレルギーに関するコホート研究。 対象となった 271 名の小児のうち、260 名が平均 6.5 歳でナッツアレルギーと初めて診断された。発症時に最も多くみられた原因ナッツは、くるみ (36.5%)、ピーナッツ (28.5%)、カシューナッツ (10.4%)、ヘーゼルナッツ (8.5%)、ピスタチオ (5.4%)、アーモンド (5%) であった。 ピーナッツアレルギーの発症は 6 歳以下の子供でより多く、クルミは 6 歳以上の子供でより多く認められた (P=.032)。 症例の 65% では、患者が初めてナッツを摂取したときにアレルギー反応が発生し、反応の 35% はアナフィラキシーであった。 2S アルブミンに対する感作が優勢 (75%) で、特に Jug r 1 (52.8%) に対する感作が多く、脂質輸送タンパク質に対する感作の関連性は低かった (37%)。	AFRUSEN Study（ナッツアレルギーコホート、スペイン）	スペインでの調査だが、有病割合、アナフィラキシー、アレルゲンなど総合的な解析を行っている
051	Pubmed	35877438	Minkiewicz P, Mattison CP, Darewicz M.	Quantitative In Silico Evaluation of Allergenic Proteins from Anacardium occidentale, Carya illinoinensis, Juglans regia and Pistacia vera and Their Epitopes as Precursors of Bioactive Peptides	Curr Issues Mol Biol. 2022 Jul 6;44(7):3100-3117. doi: 10.3390/cimb44070214.	Curr Issues Mol Biol	2022	44(7):3100-3117	10.3390/cimb44070214		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/35877438/	×		分析技術	

286	PubMed＋InformAll	10589017	Teuber SS, Jarvis KC, Dandekar AM, Peterson WR, Ansari AA.	Identification and cloning of a complementary DNA encoding a vicilin-like proprotein, jug r 2, from english walnut kernel (Juglans regia), a major food allergen	J Allergy Clin Immunol. 1999 Dec;104(6):1311-20. doi: 10.1016/s0091-6749(99)70029-1.	J Allergy Clin Immunol	1999	104(6):1311-20	10.1016/s0091-6749(99)70029-1		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/10589017/	○	くるみアレルゲンの 1 つをコードする相補的 (c)DNA クローンの特性 方法: くるみの体細胞胚から調製した cDNA 発現ライブラリを使用して患者血清との IgE 反応性についてスクリーニング 結果: 組換え融合タンパク質が誘導され、検査した 15 名の患者のうち 9 名で、血清 IgE に結合、主要なアレルゲンとして特定、Jug r 2 と命名された。種子タンパク質のビシリン グループをコードする遺伝子と有意な相同性。47 kd バンド Jug r 2 の N 末端配列決定により、前駆体から得られた成熟タンパク質であることを確認。 IgE 結合阻害実験では、Jug r 2 とエンドウ豆ビシリン、ピーナッツ タンパク質、またはカカオ タンパク質の間には交差反応性がほとんどないか、まったくない。	Jug r 2のDNAの同定とクローニング	2000年以前の文献だが、今でも非引用回数多い 内容確認
287	Pubmed	10582717	Asero R.	Detection and clinical characterization of patients with oral allergy syndrome caused by stable allergens in Rosaceae and nuts	Ann Allergy Asthma Immunol. 1999 Nov;83(5):377-83. doi: 10.1016/S1081-1206(10)62834-7.	Ann Allergy Asthma Immunol	1999	83(5):377-83	10.1016/S1081-1206(10)62834-7		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/10582717/	×		バラ科植物及びナッツ類の安定ｙおるアレルゲン 口腔アレルギー症候群臨床的特徴	OASをどうするか？
288	Pubmed	10435479	Pérez-Pimiento AJ, Moneo I, Santaolalla M, de Paz S, Fernández-Parra B, Domínguez-Lázaro AR.	Anaphylactic reaction to young garlic	Allergy. 1999 Jun;54(6):626-9. doi: 10.1034/j.1398-9995.1999.00806.x.	Allergy	1999	54(6):626-9	10.1034/j.1398-9995.1999.00806.x		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/10435479/	×		ニンニクによるアナフィラキシー	
289	PubMed＋InformAll	10359903	Teuber SS, Peterson WR.	Systemic allergic reaction to coconut (Cocos nucifera) in 2 subjects with hypersensitivity to tree nut and demonstration of cross-reactivity to legumin-like seed storage proteins: new coconut and walnut food allergens	J Allergy Clin Immunol. 1999 Jun;103(6):1180-5. doi: 10.1016/s0091-6749(99)70196-x.	J Allergy Clin Immunol	1999	103(6):1180-5	10.1016/s0091-6749(99)70196-x		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/10359903/	○	ココナッツの IgE 結合タンパク質及び他のナッツとの in vitro 交差反応性 方法: ココナッツ摂取後全身症状を示した木の実アレルギー患者 2 名の血清を使用。ココナッツ胚乳組織抽出物の IgE 結合プロファイル及びくるみ、アーモンド、ピーナッツ、ココナッツによる阻害試験。 結果: 両患者の血清 IgE は、分子量 35 kd および 36.5 kd の還元ココナッツアレルゲンを認識。1 名の患者血清 IgE は 55 kd の抗原にも結合。 ナッツ抽出物で血清を前処理すると、ココナッツタンパク質への IgE 結合が阻害。ココナッツで血清を前処理すると、1 名の患者では 35 kd と 36 kd のタンパク質バンドへの IgE 結合が消失し、もう 1 名の患者では 36 kd のタンパク質への IgE 結合が	木の実過敏症患者おけるココナッツ に対するアレルギー反応及びレグミン様タンパク質に対する交差反応：ココナッツ及びくるみの新規アレルゲン	2000年以前の文献だが、今でも非引用回数多い 内容確認
290	Pubmed	9885728	Hernández Prieto M, Lorente Toledano F, Romo Cortina A, Dávila González I, Laffond Yges E, Calvo Bullón A.	Pollen calendar of the city of Salamanca (Spain). Aeropalynological analysis for 1981-1982 and 1991-1992	Allergol Immunopathol (Madr). 1998 Sep-Oct;26(5):209-22.	Allergol Immunopathol (Madr)	1998	26(5):209-22			https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/9885728/	×		花粉カレンダー	
291	Pubmed	9788699	Asero R.	Is walnut really a birch-pollen-related fruit?	Allergy. 1998 Sep;53(9):908-9. doi: 10.1111/j.1398-9995.1998.tb04004.x.	Allergy	1998	53(9):908-9	10.1111/j.1398-9995.1998.tb04004.x		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/9788699/	×		くるみとシラカバ花粉	
292	PubMed＋InformAll	9651458	Sicherer SH, Burks AW, Sampson HA.	Clinical features of acute allergic reactions to peanut and tree nuts in children	Pediatrics. 1998 Jul;102(1):e6. doi: 10.1542/peds.102.1.e6.	Pediatrics	1998	102(1):e6	10.1542/peds.102.1.e6		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/9651458/	○	ピーナッツあるいは木の実に対する急性アレルギー反応の履歴が少なくとも 1 つある小児における、ピーナッツ および 木の実 の初回およびその後の偶発的な摂取時の急性反応の臨床的特徴 結果: 合計 122 名の患者 (63% が男性、研究時の年齢の中央値 8 歳) が急性反応を示した。 ピーナッツのみに反応したのは 68 名、木の実のみに反応したのは 20 名、Pピーナッツと 木の実両方に反応したのは 34 名。T木の実に反応した人のうち、34 名は 1 種類の、12 名は 2 種類、8 名は 3 種類以上 に反応し、最も一般的なのはくるみ、アーモンド、ペカン。 症状の 89% は皮膚 (じんましん、血管性浮腫)、52% は呼吸器 (喘鳴、喉の圧迫感、反復する咳、呼吸困難)、32% は消化管 (嘔吐、下痢) に関係。 結論：ピーナッツアレルギー患者の3分の1では木の実に対するアレルギー反応が共存。	小児ピーナッツ及び木の実アレルギーの臨床的特徴	類似文献がある 内容確認
293	PubMed＋InformAll	9648708	Teuber SS, Dandekar AM, Peterson WR, Sellers CL.	Cloning and sequencing of a gene encoding a 2S albumin seed storage protein precursor from English walnut (Juglans regia), a major food allergen	J Allergy Clin Immunol. 1998 Jun;101(6 Pt 1):807-14. doi: 10.1016/S0091-6749(98)70308-2.	J Allergy Clin Immunol	1998	101(6 Pt 1):807-14	10.1016/S0091-6749(98)70308-2		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/9648708/	○	くるみの核に含まれる主要な食物アレルゲンの 1 つをコードする遺伝子のクローン化、組換えアレルゲンの特性 結果: cDNA クローンが特定され、Jug r 1 と命名。 このクローンにはブラジルナッツ (Bertholletia excelsa) のメチオニンに富む 2S アルブミン種子貯蔵タンパク質前駆体 Ber e 1 との 46.1% の同一性を示した。 くるみアレルギーの患者の血清 16 名のうち 12 名で、2S アルブミン種子貯蔵タンパク質前駆体融合タンパク質への IgE 結合が認められた。 IgE 結合阻害研究によると、くるみの 2S タンパク質前駆体は、ヒマ種子、綿実、カラシ種子、ブラジルナッツの 2S 種子貯蔵タンパク質アレルゲンに類似した大小のサブユニットに翻訳後修飾されることが示唆されています。	2SアルブDNAシークエンス及びクローニング	Jug r 1に関する最初の部報告 2000年以前の文献だが、今でも非引用回数多い 内容確認
294	Pubmed	9641569	Boehncke WH, Loeliger C, Kuehnl P, Kalbacher H, Böhm BO, Gall H.	Identification of HLA-DR and -DQ alleles conferring susceptibility to pollen allergy and pollen associated food allergy	Clin Exp Allergy. 1998 Apr;28(4):434-41. doi: 10.1046/j.1365-2222.1998.00246.x.	Clin Exp Allergy	1998	28(4):434-41	10.1046/j.1365-2222.1998.00246.x		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/9641569/	×		花粉アレルギー及び花粉関連食物アレルギーに対する感受性における HLA-DR、-DQ 対立遺伝子の同定	
295	Pubmed	21781807	Hill DJ, Hosking CS, Zhie CY, Leung R, Baratwidjaja K, Iikura Y, Iyngkaran N, Gonzalez-Andaya A, Wah LB, Hsieh KH.	The frequency of food allergy in Australia and Asia	Environ Toxicol Pharmacol. 1997 Nov;4(1-2):101-10. doi: 10.1016/s1382-6689(97)10049-7.	Environ Toxicol Pharmacol	1997	4(1-2):101-10	10.1016/s1382-6689(97)10049-7		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/21781807/	×		オーストラリア及びアジアにおける食物アレルギー	
296	Pubmed	9111495	Teuber SS, Brown RL, Haapanen LA.	Allergenicity of gourmet nut oils processed by different methods	J Allergy Clin Immunol. 1997 Apr;99(4):502-7. doi: 10.1016/s0091-6749(97)70077-0.	J Allergy Clin Immunol	1997	99(4):502-7	10.1016/s0091-6749(97)70077-0		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/9111495/	×		異なる加工処理されたグルメナッツオイルのアレルゲン性	
297	Pubmed	8074265	Blanco C, Carrillo T, Castillo R, Quiralte J, Cuevas M.	Avocado hypersensitivity	Allergy. 1994 Jul;49(6):454-9. doi: 10.1111/j.1398-9995.1994.tb00839.x.	Allergy	1994	49(6):454-9	10.1111/j.1398-9995.1994.tb00839.x		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/8074265/	×		アボカド過敏症	
298	Pubmed	2926087	Ortolani C, Ispano M, Pastorello EA, Ansaloni R, Magri GC.	Comparison of results of skin prick tests (with fresh foods and commercial food extracts) and RAST in 100 patients with oral allergy syndrome	J Allergy Clin Immunol. 1989 Mar;83(3):683-90. doi: 10.1016/0091-6749(89)90083-3.	J Allergy Clin Immunol	1989	83(3):683-90	10.1016/0091-6749(89)90083-3		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/2926087/	×		OAS患者のSPT及びRAST比較	
299	PubMed	3950255	Stricker WE, Anorve-Lopez E, Reed CE.	Food skin testing in patients with idiopathic anaphylaxis	J Allergy Clin Immunol. 1986 Mar;77(3):516-9. doi: 10.1016/0091-6749(86)90188-0.	J Allergy Clin Immunol	1986	77(3):516-9	10.1016/0091-6749(86)90188-0		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/3950255/	×		特発性アナフィラキシー患者のSPT	
300	PubMed	1262606	Gillespie DN, Nakajima S, Gleich GJ.	Detection of allergy to nuts by the radioallergosorbent test	J Allergy Clin Immunol. 1976 Apr;57(4):302-9. doi: 10.1016/0091-6749(76)90086-5.	J Allergy Clin Immunol	1976	57(4):302-9	10.1016/0091-6749(76)90086-5		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/1262606/	×		分析技術	
301	PubMed	1147318	Lewis WH, Imber WE.	Allergy epidemiology in the St. Louis, Missouri, area. III. Trees	Ann Allergy. 1975 Aug;35(2):113-9.	Ann Allergy	1975	35(2):113-9			https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/1147318/	×		セントルイス、ミズーリ地域におけるアレルギー疾患疫学調査	
302	InformAll	11447394	Sicherer SH, Furlong TJ, Muñoz-Furlong A, Burks AW, Sampson HA.	A voluntary registry for peanut and tree nut allergy: characteristics of the first 5149 registrants	J Allergy Clin Immunol. 2001 Jul;108(1):128-32. doi: 10.1067/mai.2001.115755.	J Allergy Clin Immunol	2001	108(1):128-32	10.1067/mai.2001.115755		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/11447394/	×		ピーナッツ及び木の実アレルギー任意登録者の特徴	
303	InformAll	8616415	Ewan PW.	Clinical study of peanut and nut allergy in 62 consecutive patients: new features and associations	BMJ. 1996 Apr 27;312(7038):1074-8. doi: 10.1136/bmj.312.7038.1074.	BMJ	1996	312(7038):1074-8	10.1136/bmj.312.7038.1074		https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/8616415/	×		ピーナッツ及び木の実アレルギー任意登録者の特徴	
304	Allegome	no hit	Su,M.,Venkatachalam,M.,Teuber,S.S.,Roux,K.H.,Sathe,S.K.	Impact of gamma-irradiation and thermal processing on the antigenicity of almond, cashew nut and walnut proteins	J Sci Food Agric. 2004 84(10);1119-1125. doi:10.1002/jsfa.1748.	J Sci Food Agric	2004	84(10);1119-1125	10.1002/jsfa.1748		https://scijournals.onlinelibrary.wiley.com/doi/10.1002/jsfa.1748	○		加工（γ線照射、加熱）の影響	